

目の健康を守る

③

医療施設の乏しい途上国を眼科医療チームが訪れて診療したりメガネを提供したりする「アイキャンプ」活動が活発だ。日本の優れた医療技術と高品質のメガネを届けるほか、現地の眼科医への技術指導も行い、目を患う多くの人に「光」を贈っている。

徳島大学国際センター(徳島市)の特任教授、内藤毅医師は2008年、モザンビークへの医療支援を主な目的に「アフリカ眼科医療を支援する会」を設立。医師や看護師、青年海外協力隊とチームを組み、毎年1〜2週間同国のへき地に滞在。発電機を持ち込み白内障の手術をする。

「眼科医が少ないこの国では治療を受けられずに失明し、さらに窮乏化する人が多い。これまでに9回のアイキャンプで計約1300人の手術を行うとともに、現地医師の技術指導を

途上国の患者に「光」を



モザンビークで現地の眼科医に白内障手術を指導
＝アフリカ眼科医療を支援する会提供

現地の医師に技術指導

「たのしみになっている」太平洋赤道直下の島国キリバスで08年からアイキャンプを続けるのは南太平洋眼科医療協力会代表で小沢眼科内科病院(水戸市)院長の小沢忠彦医師だ。医師2人と検査技師、看護師ら

のチームで2日かけてキリバスに渡り、診察や白内障手術を行う。小沢医師には、毎年大切に持って行く手荷物がある。中には私立茨城高校(同市)の生徒が集めた中古メガネが詰まっている。

盛岡市の眼鏡販売店会長、松田陽二さん(65)は1998年からメガネを集めてネパールの無医村に届ける活動を続けている。標高の高いネパールは紫外線が強く栄養の偏りや衛生状態の悪さなどで目の健康を損なう人が多い」と現地の状況を捉えている。

同校では09年から保健委員が生徒に呼びかけて中古メガネを集める「めがね回収PROJECT」を実施。集まったメガネやサングラスをきれいに拭き、毎年100個前後を小沢医師に託す。「現地では、希望者の視力に合わせて調整して渡す。白内障の手術後の患者は陽光がまぶしいのでサングラスも貴重だ」と同医師は語る。

近視が多く老眼の高齢者も増え続ける日本はメガネフレームが年間約1200万個売れるメガネ大国。使われなくなり、しまい込まれたメガネも少なくない。

世界保健機関(WHO)が14年に公表した推計によると、世界には2億8500万人の視覚障害者があり、その9割は低所得国の住民だが、8割は予防や治療が可能という。

広角鋭角